

廓宇久為壽

分六寸三	コ	ヨ	紙	表
分一寸五	テ	ク		
寸	三	コ	ヨ	粹文本
分一寸四	テ	ク		

廓宇久爲壽序

濁水情なしといえとも月を浮べ
自ら清えまゝ。草木言まじきも
雨に値て自然と花敷く。和光同塵
結縁の始也。八相成道ハ

以て其後を論まねとや。情く
維看バ。飛花落葉の初更鐘。ふ
雛妓伽闍の有爲轉變を悟る。
雷光石火の影の中。生死去來の
睦言も。如何定離の別苦ありん

廓宇久爲壽序

濁水情なしといえとも月を浮べ
て自ら清めたり。草木言ざれども
雨に値て自然と花敷く。和光同塵
は結縁の始也。八相成道は以て其
終を論ずるとかや情く維看バ
飛花落葉の初更鐘に雛妓伽闍の
有爲轉變を悟り。雷光石火の影の
中に生死去來の睦言も。如何定離

夫世の幻相を親むる。市井塵
 土。大和柿起り。磨草縞褰く。
 槿花顯る。其筆勢は。屠文の
 兩師。鳳東彈妓ハ。志摩登美ハ
 名高く。三弦の醉書ハ。蜀先生ハ
 止めまり。青樓の小格子ハ。席摩
 料理の桶ハ。物ハ。怖く。西河岸の
 鶏舌風呂ハ。青善の献立ハ。新玉
 少ハ。丁を写す。八里半の角燈皆
 流行ハ。周知ハ。ト。獨嘆息あり

の別苦なからん。夫世の幻相を觀
 ずるに。市井塵れて。大和柿起り。磨
 草縞褰て。槿花顯る。其筆勢は。屠文
 の兩師。鳳東彈妓ハ。志摩登美ハ。名
 高く。三弦の醉書ハ。蜀先生に止め
 たり。青樓の小格子ハ。即席料理の
 摘み物に均しく。西河岸の鶏舌風
 呂ハ。青善の献立に類す。土手八丁
 を照す。八里半の角燈皆流行に聞

なれ折あら。訪て來れ。通子あり
 書肆。獨夢堂の主人也。于昔
 先生去年編輯の離の花は
 後編ハ。トデス如何で昔薦の十
 着ある。待て居ますと。グット真
 面。催促おつと吞込。山櫻と。
 夢を授て。それや今宵の主人
 とい。実にお廊の語あるべし。
 落花よりとう。心あきず。流水
 久々意あり。行のりハ。如斯耶。

からずト。獨嘆息なしたる折から
 訪て來る通子あり。書肆。獨夢堂の
 主人也。于昔先生去年編輯の離の花
 の。後編は。トデス如何で昔薦の十
 符から。待て居ますと。グット真
 面。催促に。グット吞込。山櫻と。筆
 を授て。はれや今宵の主人とは。實
 に此廊の語なるべし。落花もとよ
 り。心あれども。流水更に意なし。行

昏夜を不捨。嗚呼。繁花哉。
春色人を惱めて。眠を得ざる
夏ぞ。

豊樂郷之隱士

戊寅の春 山人誌

ものは如斯耶。晝夜を不捨。嗚呼。繁
花哉。春色人を惱めて。眠を得ざる
夏ぞ。

豊樂郷之隱士

戊寅はつ春 山人誌



黄
白
水
三
角

○ 目 録

○ 前 章 の
ま じ め

入相の種ありたりや巴タダのまゝを
知くをなせし人らんとどのことうい
何れ素いと顔とあるの手をぬきとて
口を閉せ

○ 後 章 の
ま じ め

きようもあふさげとておれあからまを
ききしと情とていふあき。そのころい
ゆきしと情とていふあき。そのころい
ゆきしと情とていふあき。そのころい
ゆきしと情とていふあき。そのころい
耳不満つ

離の元後編 山人著
郭宇久為壽

○前章

花街の春色。柳柏の光景。俯て察。仰て観。言語はなの。四季俱に。紅白妍を争ひて。貴妃を欺き。李夫人を壓す。その章臺に。登るの驕者黄金を。磔のどく。鼎を。鑄のどくに。掛て聊かも惜む心なきは。殆俠客の謂なるべし。榮枯哀樂の相追ふと。昨日の現今日の夢。誰か常有とせざらんや。人皆目前をのみ識て。背後を視もの少なし。只時を得。勢ひに乗じて。遂に亢龍の悔あるを知る者は。古今に稀なり。爰に龜屋の客。忠兵衛は梅川に。相馴染てより。虚をば除て。眞實づく互に漆膠

の。契り深かりしが。情を鬻ぐ身の悲しさは偽惑。神も浮萍の。藻に住むの我からと。與所にもまなき人やあり。同じ情の捨てたくて。風に尾花のいと乱れつ。結ぶ契りも淺茅尾のおの。篠はら忍れど。あまりて人の目にも洩れ。いつか仇名も。立田越。ふた道懸る事もやと。疑ふ中の鳥屋の。きやく八右衛門が身を。戀の敵と思ふものから。其身も龜やを當分斷。中の嶋やの客となつて。梅川がもとへ通ひしかば。梅川これを。死と心遣ひし。中／＼忠兵衛に換て。八右衛門に身をまかすべき心は。露ばかりも。なけれど。爲には義理の愁しくも。嬉しと花の

移香を。とめて見せたる。憂氣おもひ忠兵衛は。いよ／＼心も荒磯の。浪に流るゝ捨小舟。定めなき身ぞ。恨みなりと。忍ぶにあまる戀衣おもひの丈を。梅川が色々と。言譯しつゝ此うへは。客もとるまじ。仲の町へもいでまじと。堅く誓し約束も。けして虚では内所から會禁も金。忠兵衛が爲ぞとおもふ。一圖よりさすが如才も。仲の丁八右衛門が迎ひとて。出るを知て忠兵衛が。約を違ひし腹立に。人目も恥す梅川を。打擲なしたる傍如無人。何解語もあらし吹。三笠山のむら時雨。氣も紅葉はの。いろ／＼と八右衛門が手まへ今。詮方なく／＼も。想ひきり／＼髪切て。漸と濟すもみな金ゆへ。トハしら菊の露ならで。置まどはせる忠兵衛が。或夜の仕工梅川が。入髪の鬢引抜て。若ひものを呼つ。我ために仇なる浮名も。口惜や是見よ斯る薄情女。

かならず此後。娼妓容語ないはせぞ。
あきれつゝと。暇乞さへそこゝに。
立出る折から。鍾四の拍手。カッチリそ
めし紅葉傘。時雨にひらきし前編の。
末意は荒増かくのどし。愚んかめやのふれ
久しぶり。なんだか敷居。高ひや
うだ。お鶴ほう。此間は。トイひながら
つる。女ぼうヲ忠さん。よふ入つしやり
ました。誠におひさしぶり。ござり
ます。愚ひさしぶりでもねへ。先刻
五十間で。見かけたせ。つるヲヤそふ
でござりましたかへ。さつぱり知ませ
んで。お見それ申ました。島屋へ。お出
がけでござりますかへ。愚イ、ヤもふ
嶋やも。面白くねへから。矢張もとの
通り。此内に仕ようと。おもつて来た
譯サ。火ばちのそばへ。愚吉にかいよりこ
れは忠兵衛さん。入つしやりませ。
トひさを一ツとんとたふさ。火ばちの
そばへすはり。おつたむかひ。二階のお
客さまは。此間のうらに入らつしや

るつもりだから。お送り申て来させ
へ。行がけに竹むらの。臺の物を忘れ
めへ。つるア。つるア。喜八どん。挑灯
だ。お履ものもこちらへ廻してよ。
トこかいへ。愚モシ梅川さんの。昨日の様
子も。承給はりましたが。どふいふも
んでござります。何かしやも困たよ
うす。ござりましたが。済ましたか
。愚井戸堀の。桐おろしを見るや
うに。済のすまねへと言た所が。お
さまらねへ譯サ。いつてへア。梅川と
言女郎は。見かけによらねへとんだ。
浮氣ものだ。昨日の譯から。些と又
聞た事もあり。どふも内に居ても氣が
濟す。といつて知ての通りの譯で。上
る事もならねへ。遺曲工面ですこ
し。今夜片を付。直に梅川が所へ行
て見た所が。すつぱり此方の思ふとふ
り。ゲットあいつが。入髪を引抜で。
みんなにきもを潰させた理屈。あんな

な女郎た。知ずに迷つたもこつちの
不運とは。言ながら突出された。お
もふとどふも心怒事。ばつかりサ。夫ゆ
へ。ろく／＼暇乞もせず。駆出してこ
つちへ来たも。本木に増る末木なし。
昔馴染の所が。矢張頼母しい譯サ。愚
んかへ然しながら。夫じやア嶋やの前
が。どふも悪ふござります。愚何に
も悪ひ事アねへ。愚の片も。すこしは
附て置し。此うへとやかうと言へば。
奇麗に拂て遣るばかりだ。愚そりやア
あなたの。御氣性だから何にもその
所じやア。ござりませんが。只梅川さん
のところ。お氣の毒の譯サ。愚梅
川が。アも思ひ切て仕廻やした。是
から又あいつが面を。踏んで見せねへ
けりやア。胸がはれやせん。愚そりや
アあなたの御疑心さ。梅川さんに限
ちやアどふもそふじやアござりますめ
へ。トはなす折から。二かいのきやくとやくと
おりて来る。女ぼうおつるつきさへ。おもて

へ出。龜サよふなら御機嫌よふ。忠もふそ
つちこつち引だらう。まア出かけて來
やしやう。龜まア一歩めし上て。トおさ
のすむふた。でうし。さかづき。先刻。忠ヲツ
よりこゝに出しあれば。すぐにつぐ。だまり
ありサ。のんで。さアおあづけだ。今日
は昼間から吞續でせつねへ。トかほ
めて。さかつ。龜モウおひとつ。忠モウいや
だ。龜サよふなら。ト手しやくてつ
づれにも一寸と嶋やへ入らつしやる方
が。よふござります。忠どふか法が。
ありやしやう。ト又いそひて。かめやを立
見つけて。里。忠兵衛を。方。モシ若旦那。どふいふも
んで。ござります。私。は。あなたが入
らつしやつた。聞。急ひで行た所が梅
さんは。癪を起て一向むちうの大騒ぎ。
嶋やの仲印に。承給はつてそりやアも
ふ。強勢に膽を。潰しました。それに
いま。し。は。あまり急ひで。駈と
て。あすこへ這入といふ。拍子。向ふか
ら來るやつに。突當て。コレごらうじ

ませ。馬鹿野の。やつとこサといふ。
瘤が額に此通り。トなで。忠あひなその
突當たのは。おれだ。方エ、あなただ
へ。それとは知す痛さのまゝに。今ま
で恨めしく。思つて居ました。夫はさ
ふと中の嶋やも梅川さんの前が。どふ
も御氣の毒でござります。ゆへ。いつれ
にも一先。お連申て來て下せへ。頼ゆ
ヘッ。吞込山。水天狗と。鼻を高くし
て。嶋屋へ駈付ました所が。お見へなさ
れず。こいつア急度。龜やと見込で。
めへりました所は。きつうござりまし
やう。何にいたせ。是にやア。急度。深
譯が。ござりましやうから。いづれ胸
をさすつて入らつしやる事だらう。忠
まア。おれと一緒に。來るが。い。
ト万里を引つれ。赤丁へまが。まん里はむめ川
忠兵衛まひづる。方。びつくり。モシわか旦那。ト
やの内へ上る。を。カ。理屈はねへ。里いふゆへ。万
ける。忠。入らつしやりませ。トさき
いてあがる。着。入らつしやりませ。トさき
いてあがる。に立て

案内し。まづ十二。疊敷のざしきへ。よふ入らつ
ともない。行儀をかきたて。
しやりました。今ばんはよほどお寒ふ
ござります。忠。大。キにサ。コウ。若衆。龜や
へ人をやつて下せへ。着。ハイ。行。ト出
かはりて。うかむる。番煎のきゆを二。方。ハイ。若
ッ。盆にのせてもちきたり出す。ト忠兵衛にやり。のこりの一ツをとつ
んな。ト忠兵衛にやり。のこりの一ツをとつ
つと見ねへ内に大きくつたの。コレ
な。鶴さんによろしく申て下せへ。虎
知りいせんよ。ト出て行。忠。里。八
と藤兵衛とおゑイトおくまでもそふ言
つて。遣りやな。方。かしこまりました。
三味藤の二めへは。あなたのお跡を慕て
來るつもりでござりますが。此等もき
つと尋惑で。大方龜やへ搜してめへりま
せう。トいふところへお定りのす。コレあ
子や。分八とんにそふいつての。おゑ
いばうトの。おくまばうを呼ぶのだ。お
客なら。筆吉。秀次が元氣でよから

お盆おぼんのトあんないに優うつくしく然しかと入い来るは。花街おきなに羽はをのす舞鶴まづらが勢いきなりひ。さすが威

あつて猛まうからず。巫女まじな座ざの花はなは。黄昏こうこんの露つゆに色いろまし。照君ていくん村むらの柳やなぎは。雨あめの外そとに翠すいをなす。知しず月宮げいぐうの綾あや伽が。天てんよりや影かげ向けん。龍宮りゅうぐうの乙姫おひめ地ぢよりや。爰こゝに湧わ出でしかと。暫時しばしば言い葉はなくして。お定さだまりの盃さかづきカッチリお着替きかへト。舞鶴座まづらざを立前たちまえ後の光景あきさま種々しゅしゅの興増きようぞう。色いろの滑稽しやれり流行りやうの花言はなごころ等ども。數多あまたありといへども。

混乱こんらんしければ。これを畧言りやくごん。空くう腰こしをかいて。手てをもくく來きたチトお片付かたづけにいり。かめやにむかひ小座こざにて。

たしては。どふでござりませう。龜かめいかさま。もふ引過ひきりだの。トうな。モシ忠さん。チト切あげのちよん／＼暮くれは。どふでござります。互たがひいかさまチト。おやすみの江えに月つきは入いけり。などもよぶござりませう。龜かめふて吉きちに先商賣せんしょう道具どうぐを。寶藏ほうざうへ收めなせへ。龜かめまだいゝじ

やアねへか。紺屋丁こうやちやうの夕立ゆふだちを見るやうに。周章しうしやうで仕廻しわいふ事もねへ。ふてしかながら。おゐらんの思召しめぞも。如何いかなれば。龜かめおきアがれ。矢張やばうはやく歸りてへやつよ。龜かめ秀しうばうなざア。さつきから後うしろを向むひて。屈意くつぎを幾いくしたか知ねへ。ひでアヤいやだ。互たがひ大方おほい千せんほど。出たらう。あくび千出せんいでと。いふから。里こいつア惡わるひ。龜かめサアまづお小用せうように。入いらつしやりませ。ト忠兵ちゆうべいへをききた

垂秀しゆうしうさきにたつて小べ。龜里かめり互たがひも跡あとに付添ついでて。小便所せうべんじよまで送おくる。此内このうちに若い者わかいもの兩人ふたりして。手てはやく取片とりかた付つて。床とこをまはし。本間ほんまの光景あきさま忽たちまちと寂寥さびしやうとなり。次の間つぎのまは。膳櫃ぜんび皿ひらさ鉢はち。ろうせきとして煤拂すすはらのどし。禿かぶおひ／＼是を梯はしの下口したぐち迄運たび出です。只屏風ただふすまの外そとには。大廣蓋おほひろがさの三ツ物さんぶつ銚子ちやうしさかづきのみぞ。残りける。龜かめ小べん所せうべんじよよ

り。ア、強氣かうきに酔よた／＼。龜かめサア／＼ち

と。お休みなさるがよぶござります。龜かめナアニ寐ねむひ事ことア。些ちともなしだ。ト

はながら。床とこの上へあがる。もつともきたる羽織うわぎは先さき廻まわぬがせて。しんそうが仕まひしなり。互たがひ立たて。もち來りい出す。龜かめこいつアきめうだ。トとりて龜かめさやうなら。ごきげんよふ。お迎むかひは例れいの通り。龜かめなんだか内うちを。案あんじるやつだ。龜かめどふも恍惚くわうくわうござります。龜かめさふ地ぢがねを出でされちやア。むり止とどめ罪つみだ。はやく歸かへて。顔かほを見るがい。龜かめありがたふござります。サア／＼お暇いそがが出たから。御勝手ごてい次第しだいで。ト筆ふでひてに。おひらきにしなせへ。龜かめみん／＼一緒に。目高鉢めたかばちと致いたやせう。トめい／＼ごきげんよふ／＼と頭かぶをさげてちんを引ひかめやはすこしあとへ残りて。龜かめ雛ひな鶴つるさん。おゐらんへ亙敷やうしきお頼たのみ申まうします。ひなモウお歸かへりなんすかへ。おかさんへよろしく。トわかれる。今いままで賑にぎやかなるも。

大風おほいぜの吹ふき跡あとのぞく。静穗ひつそとして

唯ハッテト私語声の間に。雑妓の妄言。酒客の射のみ残りて。夜もはや全くに更にけり。舞鶴は今宵初會の客なれども。仲の丁度は度々見懸。又梅川と深き申なるとは。誰知らぬものもなき。忠兵へなれば。不審所爲とおもひつゝ。床に到る。舞おやすみなんしたかへ。思まだサ。舞たばこそサ。アイおあんなんし。思こりやアおかたじけ。起かへりてのむ。舞モシイ主アどふしてまア。此方へは。お出なんしたへ。思なせへ來ちやア。惡ひかね。舞梅川さんといふ馴染の。あらつしやる客人を呼申ちやア。惡うおざりいす。思そをふり捨て來るもよく／＼な事ト。察して不便だと思つてくんなせへ。舞ヲヤそんな想はせふりを。お言なんすト罪になりいす。忠實の事サ。初會からこんな事を。いふのもあんまり馴敷譯だけれ

ど。まんざら見ずしらすといふ。理屈でもなし。唯やの内でも。落逢ふて度々見懸た。おめへの事なれば。秘隠す打あけて。今夜初會に上つたも。はやく言はまア。梅川に突出された譯サ。舞なんば主が。そふ言なんしてもみんな知て居るす。梅川さんとの譯どふして。そふいふ事がおざりいせう。虚をおつきなんし。思おめへ方にまで。そふ思はれるといふも。身に取ては嬉しいけれど。梅川が薄情事には。娼妓こんせうの木地を顯し八右衛門といふ客の襟に付て欲張きつた。さむしい心あの約束も。此約束も今じやアみんな。反古となり。そでねへ仕打をされて見りやア。足元のあかるいうち。此方から身を引て。あいつが面を踏ねへけりやアもふ。此廊へ。つら出しも出來ねへ譯。それゆへわさど爰の内へ上つた。言ちやアどふか氣まづひ。よふなれども。

是も苦界と堪忍して。どふぞ突合たくんせへ。舞そりやアぬしの。短氣といふもんで。おざりいす。梅川さんに。どふしてそんな心は。おあんなすめへけれど。それにやア深い譯もありいせうし。餘心はまた惡ひ事が。おあんなすならよく異見して。おあげなんすが。よふおざりいす。しんに迷いゝすト。どふしても愚痴に。ないすもんで。おざりいす。惡人の異見を聞よふな。女郎なら頼母しいけれど。只欲心にはかり迷つて。客のゑりに附よふに。なつちやアもふ愛想盡しさ。舞そりやア主の。疑心といふもんで。おざりいす。欲はるのも矢張。恍惚男の爲と。苦勞を致して勤めへすを。夫をそふとも想はれへせんとしんに心怒て。遂愛想盡しも申しいが。言つた後じやア後悔して。誤いすが女郎衆のあたりめへでおざりいす。梅川さんだつてな

かゝ主を。袖になんす事アもつてへねへこつざんすが。観音さんかけておざりいすめへと思ひ、すゆへ。堪忍してどふぞ行て。おあげなんし。ト火ばちにつくばつて。左りの手をもつ腹へて。右の手で火ばしをもち。灰の中への字を。むせうに書ながら。悪そのよふに眞實に。いつてくんなはる所アうれしいが。梅川がおめへのよふな心意氣なら。何にも言分なし。わつちもあの女郎にやア。騙されてむだ金も意地づく。と。まア外聞の悪くねへよふに。是迄突合たも。未始終は世話にもしよと。深く迷つた丈。つきだされたと思やア。グット腹が立てもふ。二度と再三ふり向て。見るも嫌になる譯サ。何も手めへの耻を手めへがこんなに。並べ立つて猶耻を。かくよふなれど。又そこをやア。捨る神あれば。助る神もひよつとして有たなら。あいつが面を踏やうな。事にも

ならうし。今と成ちやア。はかねへ事だが。木から落た猿を見るやうに。取付枝もねへ身のうへサ。トすこし無しにそふいふ譯で。おざりいすかへ。夫じやア梅川さんも。つまらねへ女郎衆で。おざりいす。主と梅川さんとの事ア。仲の丁でも噂が。ありいす中で其よふにぬしに。思はれなんすといふも。よくノな事でおざりいす。一ッたん浮名も立られた。くれへなら何所がどこ迄も。呼とげ申さねへけりやア。遣手衆の手めへも。外聞が悪ふおざりいす。悪義理と意氣地を。立る心じやア。まアそふいふものサチ。おゐらんのよふな女郎衆ばかり。廓にありやア何にも。客人の腹の立とアねへ。悪ヲヤわつちも客人にやア。度々腹を立せへして。氣のどくな思ひを致しす。悪そりやア客人の惡ひのだ。ハテ女郎衆だつて面白事ばかり。あるものでもなし。

心持でも惡ひ時に。嬉しくもねへ事を言れると腹も立。客人にも心を怒るよふな事があるものサチ。そりやア女郎衆の身のうへにありうちと丁簡すりやア。なんにも腹のたつ事ア些ともなし。馴染で来るうへからは。しんじつづくの所が頼母しい譯サチ。悪そふ主のように捌分客人ばかりお出なんす。女郎衆に苦勞はおざりいせんが。どふも想ふやうな客人のおざんせんには。しんに苦勞になりいす。悪外の女郎衆は知らねへが。おゐらんにおひちやア。其苦勞はなしだらう。悪傾城に苦はなひものト。見やしやんしたら間違のト。矢口の道行にありいす通りでおざりいすのサチ。悪いかさま全盛に。おもてをはれば張るほど又それだけの。苦勞が内證にあらうといふもんサチ。悪そふでおざりいすから。どふぞしんじつな。相談あひ手になる客人の有いす。よう

に信心を致しすが。どふも不仕合で。これぞと思ふ客人も。おざりいせんから。しんに苦勞を致ひす。忠こりやアどふも虚らしい。阿アサほんのこつざんす。見へにも有と申しいす所を。打あけてきかう言すは。よくの事ト。さつしておくんなんし。忠虚にもそふいつて。おめへも呼んでくんなはる心意氣なら。どふぞ來て世話をしてあげてへの。阿アサそりやア。しんの事でおざりいすかへ。おだましなすト罪にふなりいす。ト火鉢のそばをたつてをもた。忠聊染の女郎にやア。突出されるし。こんな間の悪ひ時に。どふして虚がつかれるもんか。自愧らしいが嫌でもねへト思ひなはらば。どふぞ呼でくんなせへ。阿もつてへねへ主が。その氣でお出ななせ。すへ長くよびとげへす。氣でおざりいす。忠トはいふもんの今夜ばかりの。合せ鏡なら思ひの

たねだから。唯ひと通りに突やつて。くんなせへ。阿ばかりらしい。ぬしも梅川さんの事を。打あけておつせへすから。初會の客人とも思ひいせず。こんな事を申しいすのサ。一通りにおもひいすくらゐなら。何にも。こんなに氣は揉ひせん。トたばこをすて。屏風をぐるりつたて廻して。櫛をぬぎ。夜着の中へ。這入。作者いわく。メタものなり。忠今まで耻をかいた代りにやア。是から又梅川が顔を踏んで。見せよふといふのも。おめらんの心一ツだ。阿呼びもふしいす。うへからは主の顔の。泥れへすやうな事ア。致いせんけれど。焼ばつ杭には火が附安ひとか。申しすからひよつと又。梅川さんに見飯られるやうな。事が有いすと。どふも濟いせん譯になりいす。忠ハテ一旦わつちが顔を。立てくんはるものを。何所が何處までも。またおめへの顔を立

ねへけりやア。人情が濟やせん。そんな未練な心が有りやア。何にもこんな氣を揉わけは。些ともねへのサ。まだわつちが運の能のには。仕合おもへのやうな女郎衆に。出會てまんざら。わつちがいふ事も少しは。推案てくんなはるもんだから。夫をちからに梅川が顔を。見けへす氣で居やすのサ。阿ぬしが其氣でお出ななせ。しんに嬉しうおざりいす。再々やうに申しいが子。いくら客人がおざりいしても。しんじつ相談相手に。なるやうな客人は一人もおざりいせん。夫だから。どふぞ時／＼お出なんして。未始終迄世話をして。おくんなんし。忠來るからにやア。言す共すへの末まで。世話をして惡だト言れるまじやア。女房にする氣サ。阿トつて。ほんでおざりいすかへ。忠ハテいつたん言ひ出した事ア。反古にしねへ氣せうだから。そこで女

郎衆にやア。欺されやすいのサ。舞外の女郎衆は。どぶおざりいすかしりいせんが。わつちやアどぶも主に民言へすやうで。くらうに成いすも。モシイ。はづかしい事さんすが。しんに迷ひいしたヨ。トびつたりアレサおさげしみなんすト。罪でおざりいすヨ。ト跡はボツチくの閑話にて一向に聞とれす。是正に花木實を。むすぶの。時なる哉。しばらく。思しんじつその氣でありやア。直に翌日居續して。初會馴染も迷情やうだが。梅川に膽を潰させて。やりてへ。舞モウかふ何もかも。打あけて申しいます。うへからは。どうとも主の心まかせに。成いせうがす。これ迄主も梅川さんの所へ。お出なんしてまア浮名も。立なんす程の中。おざりいすものを。定めてお言ひかはしなした。事もたんとおざりいせうし。恍惚したうへじやア。ほり物

も致イすやうな事が有いますが。若しひよつと。そんな事でもおざりいす譯なら。主も隠さずに。いつてお聞せんし。思成程おめへのすいりやうの通り。ほり物もして居やすが。そりやア今にも消して仕廻やす。舞そんならきれへに。消てお仕舞なんすかへ。思知れた事サ。あいつが名を火あぶりにしても。未わつちが腹は愈せん。したが人の事はかり。咎め立をしても。おめへの身のうへに閑事があつちやア。罪が深へによ。舞そりやア。些ともおざりせん。奇れいなもんで。おざりいすヨ。耻かしいこつざんすが。恍惚した客人と。いつちやア今夜がはじめて。おざりいすものを。思こいつア。どふも慮らしい。舞アレサしんのこつざんす。疑意なんすなら。どこでも改めてごらうじいし。

トあをむけになり舞方の胸をまくつて見せる。

思その白ひ所へ疵を附させてやりてへの。舞梅川さんの名を。お消しなんしたうへじやア。どふとも主に此骸は。まかせへす氣で。おざりいすヨ。思夫じやアまふ片時も。かふして置がいやだ。トたばこをすい付ておきあがり。うてをまくり吹散にて。ほり物をやきけんとす。舞アレサお待なんし。たしか袋もぐさ。おざりいした。ト同じく起あがり。ちがひたなの胸にあるこだをとり出して。こりやア此間だ客人にたのまれて。淋病の薬を。こしれへした残でおざりいす。それがやくに立いすといふも。矢張深縁で。おざりいせう。

りん病の薬を。娼妓の製す事。諸客知る所なれば。其法を誌さず。もつともその家ノによりて。少しづつの劑はかはれども。艾葉の黒焼は。大概加味する事なり。

「悪こいつアきめうだ。チットあかるくして。くんなせへ。」舞うぶの内へ入る。これでおざりいすかへ。」「これより忠兵衛は。もぐきをもつて腕のほり物。梅川が名を焼消す。此うち舞鶴は。しかみ火鉢の中の炭を。まん中へ掻寄。煙草盆の火人の火をとり分て。アウウウウウ吹おこし。屏風の外に有。銚子をとつて。煙をする。夫人の心を惑す事。色欲にはしかす。小實なる哉。和漢ともに女の爲に。身を過まつ事。あけで算べからず。哲夫は城を成し。哲婦は。城を傾く。恐るべし。」「

「忠サア此とふりだ。是でいひぶんは有めへの。舞ヲヤ／＼眞赤に腫へした。さぞ炎うおざりいせうまへ。」「悪なアに。そんなでもねへんサ。舞マアアッおあんなんし。つきたづきをと。忠こいつア有がてへ。ア、能爛だ。」「

こつち夜が明るだ。うう。チット。寤る事に。しやせう。いとこへは舞アレサまだ色／＼はなしがおざりいすから。おねかし申は致イせん。この屏風をもとの如くたてへは。○評に曰く。忠兵衛今宵初會とはいへども。兼て相識の中にて。舞鶴も情移におもはざる心より。互ひに言を明白になす事。是ひとへに人情の然らしむる所ならん。譬へ一夜といへども。百夜の契りを結ぶは客の才不才に有か。將娼妓の愛縁奇縁に。よるならん耶。

○後章

ば。金はかりに遣給ふ。神代のむか／＼より。千早振るゝも。情染も。天の岩戸の床の中。開きこそ尙おもしろからめ。情も細女のみとのりに。腹をたちからをの。力瘤は大に神がる事なるべし。爰に舞鶴が妹女郎。折づるが客風子會方の。とり扱ひが氣にくわねへ。と言て夜更小更に。若ひ者を呼付。床のうへに大安坐。銀の煙管を。ヤニサにかまへて。人惡の太平らく。風コレ爰の内の。家風かア知ねへがナ。成佛不達た幽霊を見るやうに。時／＼面ア出しちやア。姿隠去る女郎を。片じめへだの。早仕舞だのト風ッ吹の湯屋を見るやうな。名を付てお客さまへ出しても。濟と思ふかへ。此方がナおわらんごかしで。突やつて遣ア道具市の。入札を見るやうに。おかしく附上るのが。氣にくわねへ。番それは頓だ事で。ござります。

あいを知つたりなりにならべ立つといへども。さ
 すがに大見せの青ちゆへ。人がよく風の柳のし
 なやか
 おもしろおかしく。あやなしてど
 ふぞはやく。夜が明ればよいトま
 つ心のうち。實に苦界と謂つべし。
 君子は和して。同じうせず。小人
 は同じうして和せず。后の讒種と
 なるこそ。古今の未至なるべし。
 話説も忠兵衛は。舞鶴が赤心の情に
 惟くとして思はず。漆膠の契りを結び
 しも偏に。梅川が意を不審。一朝の怒
 りに其身を忘れ。遂ひに斯る事とはな
 りて。夜明ぬれど居續の。二會馴染に
 一際花やかなる。昼の座敷。又夜の光
 景とは。大ひに異なりて。湯あがりの娼
 妓。塩引の朱を奪ふ。紫の痼患は夕ア
 のくせつ。の佛にして顔に畑の雛妓は。さ
 百性の娘にもあるべからず。そばかす
 だらけな禿。粉屋の親判にもなかるべ

し。笑窪も。あばたと。へんくわの玉磨ぬ疵の。有る無きまで顯はに知れる。○の世界錦の裏に。くわしければ今更又いふも。くだなりけり。爰にまた梅川は。此舞鶴が座敷と向ひあはせの。住居にて往來ひとつ隔つばかり。どちらも同じ表ざしきに。忠兵衛が笑ふ聲聞か。晒落る言葉。しんぞう禿かはなしまで手に取るやうに聞ゆるも。是皆聞がしと云ぬ斗の舉動に。梅川いと悲しさの。泪に沈む心ねを。岩間の貝の。かいもなく只髯／＼ト一人寐に。昼もさびしき屏風の中。癪が邪魔してふさがせる。折から廊下をばたばたとか梅川が枕もとへべつたり居りて。ごへ。摩モシイおゐらんへ。舞鶴屋の。二階に忠兵衛さんがお出なんして。アノ騒ぎをお聞なんしたかへ。あんまりな仕打ともいひす。いつそ口惜くつてなり

いせん。おいらんの客人と。いゝす事ア花街中で。みんな知ていすこつざんすから。附廊のぬをおおげなんすとも。龜やの御亭さんを。呼なんして一通りは。むづかしくおいゝなんすがよふおざりいす。しみ／＼腹が立て。なりいせん。ト。肩先をふるわ。摩先きから何もかも聞て居いす。その事も心付ては。いゝすけれど。あの矢先へ何を申て。遣はしいしたとつて。中／＼聞入なんす忠兵衛さんの。氣せうでもおざりいせんから。まア主の心の濟いすほど。どふでもしなんすが。よふおざりいす。トしのび涙の友千鳥。ほれぬいてゐる御城の心はなかく別なるべし。折からかむるむ二股にかけ。モシイおゐらんへ。今忠べいさんが手。舞鶴さんをお連なんして。仲の丁へお出なんした。格子先で手。いづそいらんの事を。悪くお言ひなんして。夫が悲しくつてなりいせん。ト

廊になれたる子座のない。摩モウなんにもおてあわれやましにけり。いゝなすな。これほどまでに。苦勞を致いして。どふぞ主の都合のいゝよふト思いうす心が。届きいせん。こんな災難に合いすといふも。なんぞの罰でおざりいせう。邪見にされれば。されへすほど尙未練がおこりいして。何の事も思ひせん。たゞ主のそばつかり。氣に懸りいすも染／＼。惡縁でおざりいす。摩おいらんの心が。それでお出なんすを。脇にしてあアいふ仕打をなさりいすから。しみ／＼腹が立いす。トハ申いすもの。忠兵衛さん達でも。その分ッてお出なんす客人で。おざりいすからよく其譯さへ。立いたら。今にもお出なんすは。急度でおざりいす。今仲の丁へお出なんしたなら。大方龜やでおざりいせうから。梅二を連てテヨットめへりいして。忠兵衛さんによく。その譯を申いして。おいらんの

あかりの。立いすやうに致しせいせう。
「おありがたふ。おざりいすが。舞鶴
さんも。お出なんすもんだから。若そ
こがひよと。意氣張つくでず。忠兵
へさんもいろ／＼。愛想盡しな事でも。
お言ひなんすやうになりいしちやア。
猶／＼耻をかく譯さんすから。まア打
捨て置て。様子をこらうじいし。赤そ
れでもあんまりでおざりいすト。意氣
地をみがく廊の。ならひ眞實に。恍惚
ては凡そ。娼妓ほど情の深きはな
し。夫にはあらで忠兵へは。まひ
つるを伴ひ。仲の丁の龜やの二階。
一しは晴れた。ひるの遊びも。い
つしか金鳥西山に隠れ。玉兔東海
に顯れて。花また紅葉の色深く。
誰かこゝに春秋の時を知らんや。
夜見せのすがさ。チャミラゴシ
／＼／＼。素見。地まはりの。そ
／＼ふしイタク」むさし野の原に夜屋あ

のきり／＼す。思ひ切しきれ切れと鳴
く。「おはこ来るかやアと。田歩のはし
こやまで出て見たが。いふとも。ろく
／＼聞すに。腹たつ未全てん。聞た風
りん。そばうり。あまさけ。あつたか
いコリヤいよさの。すいしよで。氣はさ
んぞ。○有造無造の往來を。狭しと歩行
一墜は。舞鶴が客忠兵へ。酒の機
嫌の。千鳥あし貫あかしのうら馴
染み。今宵もなかつて。居續に南華
のゆめおや結ぶらん。爰に又問
万里は。かねて梅川より恩譯を蒙
りければ。忠兵へが今日の仕打を。
氣の毒におもひ。舞鶴やの戻り懸
ひそかに立寄。下座敷にて。娼妓
梅春に逢ふて。何かひそ／＼。
近いづれにも翌日の朝。龜やまで一寸
子。奉おいらんと相談して。置いた
が。そのつもりでおざりいす。所さ
やうならかならず。おゐらんへよろし

く。トをふり／＼。○花と寐る。霞も鎌
の別れかな。いとし可愛もおさら
ばに。その移香は残りけり。忠兵
へは龜やへ立歸り。湯豆ふの熱劑
は。ひつかけるとも。引懸られぬ。
今朝の拂ひ。八兩三分二米。あ
アひよんな張合から。とんだむた
金を遣ふたト。おもひそろべくそ
ろはんの。玉げて居たるその所へ
入来る。梅川がしんぞう梅春。夫と
見る。忠兵梅春さんお早への。お客をおく
つて歸懸かへ。春イミエ主に。ちつと
手はなしが。おざりいして。めへりい
したヨ。忠ハアおれも。おめへにやア
ちつと。はなしがある。サア湯どうふだ
一ッ呑な。奉おありがたふ。おざりい
す。一ッおいだき申しせう。トそばに
碗をと。これに致しせいせう。トあをつきりて。一
兵へにい。さあれば。さけの。忠サア／＼
ひに乘じて。發言せん下たごゝろなり。忠サア／＼

豆ふをくひなし。添おありがたふ。ト湯ど湯を一口モシイ忠さん。おむらんの事さ
んすが。トいか田忠梅春さん。その咄も聞かふが。まアわつちが断を先へ聞てくんなせへ。外の事でもねへ。ふつとした張合で。乙日の晩から舞鶴やに。居續はじめて行た内といひ。又この内も知てのとふり。暫らく跡の道にして。今朝の勘定はまア。貸てくれろ共いひにくし。人を頼んで取よせるまでも。懷中を見られる口惜サ。なんと梅川に此の間。十兩ばかり働いて貰て来て。くれる事ア出来めへかの。頼めしのお困りなんす事を。申ししたら。よもやおむらんもいやとは。おつせへすめへ。悪今となつちやア。假令いやと言へても仕方アねへが。そこが昔馴染と。紅花染だ。利そんなら一寸行て。めへりいせう。ト急ぎたち戻りて。斯と梅川に告げければ。梅川は兼て

忠兵へに遣らんと。八右衛門より貰し十兩の金を。ざつと封して置けるを直に。梅春にわたしけるま。梅春は又服やにいたりひそかに。これを忠兵へにわたせば。忠兵へも。思ひがけなき金を得て。歡びつゝ見れば。ざつと封して上書は。忠兵へさま梅より。としるしあれば。封おし切て。これを讀に。その文言にいわく。

一すじにまよふ心も二すじに。今ぞわかる。道のくの忍ぶにあまるうらみを。はいきてものおもはんよりも。さへて嬉しき命にてこそいへ。さるにてもはかなきは。かくとも知らぬ睦言に。ともに遠山の雪を見んとよそふは。しらぬかねとを。さよの枕にかはせし。みな偽りの世なりしを。ままとたのむあた心。さこそお

かしくおはすらめと。いにし事を罪深く。くやみはべり。い。い。

ト讀より忠兵へ心のうちで。扱は梅川は我に見捨られしとて死る覺悟か。可愛やトおもはづ。泪のハ。又立飯の執着の想に迫る。眞實誠暫らく。言葉もなかりける。頼おむらんの苦勞も。みんな主のためで。おざりいすものを。少しは。さつしてお上なんし。思みんな此方が悪るか。其言譯には歸りがけ。ちよつと立寄て誤らうから。さきへけつて此礼を。よく梅川へ言てくりや。頼そんならかならず。お出なんし。ト立とこへ。方コレハ梅春さんけしからまん里來り。す。お早い事。時にモリお歸りかへ。ト白づつて別れるも。旦那如何で。ござかねて承知の事なるべし。思イヤきついのサ。これ

じやアどふも。未練が起る。したが舞鶴が事も、氣の毒なもんだの。匠ハ、兩の手に。桃と櫻の花角力取組でから。負たものがふ運ササ。愚いかさま今と成ちやア。さふより外に志案はねへト。これより龜やへ勘定を仕廻。万里を引連て。西河岸の丁子風呂にいたる。抑、此泉湯は當世流行にして。都て會席の風流善盡し。美盡せり。折鷹極揃の。煎茶。南京の器に薫りを染め。舟ばし屋の菓子。樂焼の皿に奇麗なり。青竹の灰吹は。口切の式を學び。屠龍先生の画は。賓客の目を驚す。のしこんぶの。盃事は。萬歳の始めを祝し。青善の献立。もつともきり目を正しうす。蓮上の雅品。俗様をはなれて。古今別の世界なりけり。忠兵へは。是より万里に別れて。只獨梅川がもとへ來りしも。舞鶴が手まへを

忍ぶ頬包。隠せど色か梅はちの。紋はたしかに忠兵衛さんト。見咎られしに氣も付す。上るやいなや。禿が使ひ舞づるが奴。梅川が返事もさすがつのめ立。うしと見しよぞ今は。意氣地の振合に。妹脊へだつる山ノの。恨みもよしやよしの川。おなじ流れの身をくみて。舞づるが座敷には。雛妓禿口ノに。「よふおざりいす。性惡な。客人ならお歸りなんす時。大門に附へして。お連申て來いす斗で。おざりいすヨウ。覺悟をしてお出なんしヨウト。いふ声に又梅川がざしきより。「與所へ馴染んでお出なんす。客人をおあげなんすといふは。万治以來でござりいすヨウ。此方の客人へ。指てもおさしなんすト。爵があたりいすヨウ。トロムに。梅モウだまつてお出なんし。こつちから彼是申いしちア。惡ふおざりいす。トいわ

だん。惡そんな事ア打捨ておいて。皆か酒を呑がいう。ト是より車座に居り色ノ下卑喰に。暫く時を移しける。前後の光景くたノしければ。略す。忠兵へは大酩酊となつて。梅川に伴れて床にいたれば。其儘倒れて。前後忘大の字形の。寤姿にフツ氣の附く。腕のほり物亦く腫れて消した跡。見るより梅川目にもつ涙。只一圖におもひ込。男心の嫉妬やと。身をふるはせて。ワットばかりに嘆き沈む。こへにおどろく。摩モシイ。おいらんへ。されて。梅ハット。きいたるためい。見エ、怖ひ夢を見した。ト咄す。は箕輪の。別荘に。病氣保養の。引籠中。雛妓梅春が。看病の枕もとにて小鍋立。摩モシイ。粟の。粥が出來イした。トいわ。梅そふでござりいしたつけね。チツトの間トロトロト眠りいた中に。おつな夢を見いして。いつそ

氣にかゝりいす。トなみだば 盧生がおも
ひ。呂翁が術。邯鄲の枕にかゝる憂氣
おもひ。今は中／＼堪へかねつゝ。
忠兵へ方へ斯と告て。或夜月なき
を幸ひ此別莊を忍び出。二の口村
迄の道行は。院本に譲りて。筆を
とゞめ畢ぬ。

来开歳春幾敗山人著

娼妓わうき 筆硯ひつげん 花街はなまち 壽圖しゅず 女め

つき川つきがわ 竹たけ 小品しょうひん よくよまる。里さと まるめゆるを八幡やちま の
 とくせえよう。体み をまある。教しやう 生せい 舎しゃ かごを赤あか せく
 再また 外ぐわい 目め 出で て移うつ ちて子こ 三さん へ
 と。多おほ のえさん極ごく 秘ひ 傳でん 茶ちや と硯げん よう 不ふ 了りやう
 くれう。知し らるものあらん